

兵庫県篠山地域の超丹波帯味間層と北摂地域の超丹波帯との地質学的関係

Geologic relationship between the Ultra-Tamba Terrane in the Sasayama (Hyogo Prefecture) and Hokusetsu (Osaka Prefecture) areas

菅森 義晃 [1]

Yoshiaki SUGAMORI[1]

[1] 阪市大・理・地球

[1] Dept. Geosci., Fac. Sci., Osaka City Univ.

超丹波帯は Caridroit et al. (1985) によって設定されたペルム紀の碎屑岩を主体とする地質体であり、その後 Ishiga (1990) などによって再区分がなされている。Ishiga (1990) は超丹波帯のペルム紀地質体の他にペルム紀地質体を不整合に覆う上部ジュラ系猪名川層群を大阪府北部の北摂地域と兵庫県篠山地域に設定した。しかし、北摂地域の猪名川コンプレックス（仮称、猪名川層群相当；菅森，2007）及び高槻層（猪名川層群相当；菅森，2006）の堆積年代はペルム紀中世後期～新世であることが明らかになっており（楠ほか，1997；菅森，2006，2007 など）、猪名川層群の年代論や造構的位置付けに問題が生じている。兵庫県篠山地域には猪名川層群相当とされた味間層が分布し、中生界とされている（戸倉・高城山団体研究グループ，1987；栗本ほか，1993）が、堆積年代や造構的位置付けについて問題がある（高城山団体研究グループ，1993；宮地ほか，2005 など）。これらの問題を解決することは超丹波帯及び丹波帯やペルム紀～ジュラ紀の東アジアのテクトニクスを考察する上で重要と考えられる。今回、筆者は味間層の赤色珪質泥岩からペルム紀新世の放散虫化石を得たのでここに報告し、その意義を論じる。

研究地域（兵庫県篠山市西部）の超丹波帯は、栗本ほか（1993）によれば、味間層及び上滝層からなり、白亜系篠山層群や有馬層群によって不整合に覆われている。味間層は上滝層の構造的上位にあり、上滝層を不整合に覆う、ないし堆積接触関係とされている（栗本ほか，1993；戸倉・高城山団体研究グループ，1987）が、詳細は不明である。両層とも碎屑岩を主体としているが、砂岩組成は異なっている（楠・武蔵野，1990，1991）。化石産出露頭は篠山市西部の大山下に位置し、周辺には味間層の砂岩泥岩互層及び破断砂岩泥岩層が分布する。これらと化石産出露頭とは露頭欠如ないし軽微なすべり面で接している。以下に放散虫化石を含む地層について記述する。

化石産出露頭は全体で厚さ約 90cm の珪質泥岩シルト岩砂岩互層からなり、これらのうち 6 層の赤色珪質泥岩からペルム紀を示す放散虫化石が得られた。そのうち 4 層からは *Albaillella levis*，1 層からは *Albaillella lauta* が産出した。砂岩層直下の珪質泥岩層からは *A. levis* が多産する。Kuwahara et al. (1998) のペルム系上部統放散虫生層序に基づくところ、これらの珪質泥岩層は *Neoalbaillella ornithoformis* 群集帯上部かつ *A. levis* 多産帯（*A. levis* 多産帯は *N. ornithoformis* 群集帯上部にほぼ相当する）に対比され、その年代は八尾・桑原（2004）によればペルム紀新世中期である。

上述したように、味間層の碎屑岩の堆積年代は中生代とされていたが、確証に乏しく、今回の放散虫化石の発見は、味間層の堆積年代がペルム紀新世中期を含むことを示している。そのため、味間層がペルム紀地質体を不整合に覆ったジュラ紀の堆積物とは考えられない。そして、北摂地域の猪名川コンプレックスと高槻層は味間層と岩相及び堆積年代が類似するため、これら 3 者の碎屑岩はペルム紀中世後期～新世中期にかけて一連に形成された可能性が高く、超丹波帯に帰属するペルム紀の地質体として再定義すべきであろう。

猪名川コンプレックス、高槻層及び味間層の最も若い碎屑岩はそれぞれ *N. ornithoformis* 群集帯下部、*N. ornithoformis* 群集帯下部～中部及び *N. ornithoformis* 群集帯上部に対比され、これら 3 者の堆積年代に差異が認められる。北摂地域では、より若い碎屑岩を含む猪名川コンプレックスが国崎コンプレックス（仮称；菅森，2007）の構造的低位に位置することが明らかにされ、さらに高槻層が猪名川コンプレックスの構造的低位に位置付けられる可能性が指摘されている（菅森，2007）。このような構造的配置、堆積年代との関係を味間層にも適用すれば、味間層は高槻層の構造的低位に位置付けられる可能性がある。

なお、高城山団体研究グループ（1993）は栗本ほか（1993）が味間層とした泥岩から三畳紀中世放散虫化石の産出を報告し、丹波帯に帰属する可能性を述べているが、この泥岩の帰属については未解決とし、明言をさけている。筆者の予察的検討では、この泥岩は上滝層に帰属する可能性もあり、現在検討中である。今後、三畳紀地質体の帰属の検討と共に篠山地域及び北摂地域と他地域の超丹波帯との関係の解明が必要である。